第十七講　韻文の鑑賞②

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの(1)~(3)の問いに答えなさい。(本文中のAとBは、出題の都合上付けたものです。)

物の色や形を言葉で言い表すのは難しい。美しい夕焼けの雲を描写したい。「真赤な夕日に染まった雲がとぎれとぎれにどこまでも続いている」と書くと(注1)二十八音。十七音の俳句には、もっと短く、もっと迫力のある表現が欲しい。そういうとき比喩が力を発揮します。

A　火を投げし如くに雲や朴の花　　野見山朱鳥

――夕焼けに染まり、火を空に投げたかのような雲。高々と咲く朴の花。

もしもこのような景を画家が絵にしたら、イメージは絵の通りに固定します。誰が見ても絵は同じです。一方「火を投げし如くに雲や」という言葉から思い浮かべる景は、読者によって違います。読者は「火を投げし如くに雲や朴の花」という言葉が許す範囲で、自由に景を思い浮かべることが出来る。ひとくちに描写と言っても、絵と言葉では違う。言葉が少ない俳句の場合、描写は断片的な、ヒントのようなものでしかない。しかし、いいヒントを得たとき、人の想像力はフル稼働します。

野見山朱鳥は比喩の名手でした。もう一つ作例を拾います。

火の独楽を廻して椿瀬を流れ　　野見山朱鳥

「火を投げし如く」は直喩。「火の独楽」は暗喩(注2)です。回りながら瀬を流れる落椿の色を「火」に喩え、回る様子を「独楽」に喩えました。動きのある美しい句ですが、さきほどの「火を投げし如くに雲や」のようなインパクトはない。「火を投げし」は、□と形を統合した比喩です。「火の独楽」は、イメージが□と動きに分かれています。そのため、パンチ力が弱い。

比喩は、より抽象度の高い事象を表すときにも用いられます。たとえば、

B　双頭の蛇の如くに生き悩み　野見山朱鳥

は、岐路に迷う心を「双頭の蛇」に喩えました。理知的な句です。抽象的・不可視的なもの（人生の岐路）を、具象的・可視的なもの（双頭の蛇）に喩えて成功するには相当の力量が必要です。

（岸本尚毅「十七音の可能性～俳句にかける」より）

（注1）「二十八音」の表記は原文のまま。
（注2）暗喩…隠喩のこと。

(1)　次のア～エのうち、Aの俳句と同じ比喩表現が使われている俳句はどれですか。一つ選び、その記号を書きなさい。

ア　来しかたや馬酔木咲く野の日のひかり　水原秋櫻子
イ　大いなる春日の翼垂れてあり　鈴木花蓑
ウ　鴨渡る明らかにまた明らかに　高野素十
エ　退るとき紙のようなる盆踊り　大畑等

□

(2) 本文中の二つの□には、同じ言葉が入ります。あてはまる言葉を**漢字一字**で本文中から抜き出して書きなさい。

□

(3) Bの俳句の説明をふまえると、次の俳句の表現の特徴はどのように説明できますか。あとのア〜エのうちから、最も適当なものを一つ選び、その記号を書きなさい。

去年今年(こぞことし)貫く棒の如きもの　高浜虚子(たかはまきょし)

ア 「去年今年」という具象的なものを詠(よ)むことで、「歳月の移(うつ)ろい」というイメージを喚起し、「日常の普遍性」という抽象的なものを表現している。
イ 「去年今年」という抽象的なものを詠むことで、「歳月の移ろい」というイメージを喚起し、「日常の普遍性」という具象的なものを表現している。
ウ 「棒」という可視的なものを詠むことで、「まっすぐな線」というイメージを喚起し、「歳月の移ろい」という不可視的なものを表現している。
エ 「棒」という不可視的なものを詠むことで、「まっすぐな線」というイメージを喚起し、「歳月の移ろい」という可視的なものを表現している。

□

【岩手県】

Step 2・3

二

次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A　ひぐらしの一つが啼けば二つ啼き山みな声となりて明けゆく　　四賀光子

B　八月のまひる音なき刻ありて瀑布[注1]のごとくかがやく階段　　真鍋美恵子

C　旅人の耳は澄みけり山行きて秋の光のおと聴くほどに　　安田章生

D　水甕[注2]の空ひびきあふ夏つばめものにつかざる[注3]こゑごゑやさし　　山中智恵子

E　湧き上がりあるいは沈みオーロラ[注4]の赤光緑光闇に音なし　　秋葉四郎

F　地ひくく咲きて明らけき菊の花音あるごとく冬の日はさす　　佐藤佐太郎

注1　滝。
注2　水をためる容器。
注3　なにものからも自由な。
注4　北極や南極に近い地方の空に見られる、帯や幕のような光。

Step 2

1　直喩を用い、動くはずのない物体を、音と動きがあるかのように表現し、迫るような存在感のある短歌はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

□

Step 3

2　目の前に大きく広がる情景を表現することで、動と静の両面を持つ壮大な自然への感動を詠(よ)んだ短歌はどれか。A～Fの中から一つ選びなさい。

Step 3

3　次の文章は、A～Fの中の二つの短歌の鑑賞文である。この鑑賞文を読んで、あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

この短歌は、調子や意味の切れ目が、二句目と三句目の間にあり、はじめに聴覚に関連させて表現したうえで、「Ⅰ」という視覚で捉える言葉に転じ、さらにもう一度聴覚で捉えたように表現することで、音なきものに音が感じられるかのような情景を想像させている。

また別の短歌では、時間の経過とともに、次第に力強くなってゆく生き物の声によって、それらを取り囲む自然が、まるで量を増して大きくなっていくように感じられる様子が「Ⅱ」という言葉にいきいきと表現されている。

(1)　Ⅰ にあてはまる最も適当な言葉を、その短歌の中から**三字**でそのまま書き抜きなさい。

(2)　Ⅱ にあてはまる最も適当な言葉を、その短歌の中から**八字**でそのまま書き抜きなさい。

【福島県】

〈Note〉

第十七講　韻文の鑑賞②

Step 1

一

解答

(1) エ　(2) 色　(3) ウ

解説

(1) Aの俳句では「～如くに」と比喩を示す語が用いられているので「直喩」。エの俳句も「～のようなる」と同様の語が用いられている。

(2)「火を投げし…」と「火の独楽を…」の二つの俳句は、本文の初めに示した「物の色や形を言葉で言い表す」ものの例として挙げている。前者は「統合した比喩」で、後者はイメージを分けた比喩であると説明している。

(3) Bの俳句は「抽象的・不可視的なもの（人生の岐路）を、具象的・可視的なもの（双頭の蛇）に喩え」たもの。設問の俳句では「去年今年」のつながり、つまり「歳月の移ろい」が「抽象的・不可視的なもの」であり、それを可視的な「棒」で表現している。

Step 2・3

二

解答

1、B　2、E　3、(1) 秋の光　(2) 山みな声となりて

解説

1、「ごとく」というたとえを示す語句を用いて、階段が輝く様子を滝にたとえている。

2、音を立てることなく、夜空に光の広大な模様を描き出すオーロラを詠んでいる。

3、(1) Cは、「けり」という句切れを示す語が二句目にある。「旅人の耳」という聴覚から「光」という視覚へ、そして「おと聴くほどに」という聴覚に戻っている。(2) Aが、「一つ二つ」とひぐらしの啼く数が増えるにつれ、山全体が声を発しているかのように表現している。